

産業技術研究におけるバランス



光川 寛

* 新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO)
副理事長

最近少し気になっていることがある。表現は厳密さを欠くが、判り易いのであえて使わせてもらえば、産業技術における「基礎的研究」と「実用化研究」のバランスである。

現下の厳しい経済情勢のもとでは、早期の技術の実用化、ビジネス化を強く意識した研究に、選択的、重点的に取り組むのは至って当然で理に適っており、何らこれを否定はしない。しかし、日本の産業競争力の強化、維持は、継続性を確保すべき課題である。あまりに目先の短期的成果を狙った研究のみをやっていたのでは、次のフェーズでネタ切れになりはしないかと心配である。日本の将来を担う産業技術の芽への取り組みも同時並行的に進めていかなければならないと思う。

産総研とNEDOは、経済産業省の産業技術政策を支える車の両輪である。両者には競合する所はなく、相互に補完的であり、現に一致協力して研究開発を推進している。産総研は融合分野を含め産業技術全般にわたる研究開発を自ら実施する研究機関である。他方NEDOは、研究開発をコーディネートしマネジメントすることに加え、研究成果の実用化や社会への導入普及までをも行う産業技術政策の実施機関である。このため、今日状況下では、その役割上どうしてもNEDOの方が、より強く近場の産業競争力強化なり技術の実用化なりを狙った方向に舵を取らざるをえない。

経済産業省全体として見たとき、両者が同じように近場をにらみ、実用化を狙ったスタンスを取っていたとしたら大変まずいのではないかと思う。異なってこそ全体としての総合力、持続力が発揮されるのではなかろうか。

そこで現下の状況では政策バランス上、とかく手薄になりがちな産業技術の「基礎的研究」への取り組みも産総研に期待したい。産総研の研究者は、時代の要請に応えた実用化志向の研究の他に、将来の産業技術の核や芽になる独創的な研究に一定割合の時間と研究費を割いてほしい。研究者の発意によるユニークな発想の研究を研究所が許容するような余力がほしい。幸い萌芽的研究や分野融合型研究を所内で支援する制度が創設されているようだ。是非ともこれらを充実して欲しい。